

それぞれのマリア

阪田寛夫
それぞれのマリア

講談社

それぞれのマリア

昭和五十三年一月二十八日第一刷発行

著者——阪田寛夫

©Hirao Sakata 1978, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三—三三 郵便番号二三 電話東京〇三—九〇一—二二 振替東京六—三三〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——九八〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。(文二)

目次

うさぎ

5

陽なたきのこ

35

記念撮影

71

暮の二十七日

117

よめな摘み

149

猫のなかみ

193

あとがき

233

装画 鈴木悦子
装帧 栃折久美子

阪田寛夫 連作小説集

それぞれのマリア

う
れ
あ

キクがめくらになつてから、今日で三日間一緒にいてあげている。病気ですと噓をついて仕事を休んで、わたしが部屋から出るのはバセリやパンを買いに行く時くらいだ。

目が見えなくなるとキクは兎に戻ってしまった。耳を垂直に立てて、目も細くあげたまま寝ている。落ちつかないかわいそうな眠りだ。耳を立てる時は人間の正坐とおなじで、体も固くしている。それまではまるで「私の夜ですよ」と言う風に楽々と寝ていたのに。――ベッドに腰かけて絵を描いていると、いつのまにかうしろに来て、足を投げ出す。わたしは右手でキクの絵を描きながら左手でさすってやる。やめると体をしゃくりあげるようにして、もっと続けてといった。……眠りこむと耳がどこかへなくなつたようにびたんと頭から背中にくっついて、姿が次第にゆるんできて、しまいに安心して白いおなかをすっかり見せてしまう。私にはどうしてもただの兎とは思えなかつた。ころんところがること一つにしても、わざわざ派手に跳び上つてから横倒しになつてみせるのが得意で、「大げさねえ」とわたしは笑っていた。でも猫みたいに媚びるようなところは絶対なくて、それがまたすてきだった。

去年の秋から冬のはじめにかけて、わたしたちは何としつくり暮らせたことだろう。今から

考えるとすてきな映画をみたあとのようだが、たとえば「朝のかけひき」の面白さ。いつもわたしが目覚めるまでは静かだったキクが、なぜだか去年の秋から六時二十分になるとわたしを起こすようになった。その起こし方がもう露骨なのだ。かごの底に敷いてあげた雑巾を両手で穴を掘るみたいにひっかいては、一寸休んで背のびしてわたしの方を見る。ベッドのわたしが果たして寝返りをうつのか起き上がるのかと、見ながら待ち構えている。私が起きるとまるで犬みたいに喜ぶ。出してもらいのを待ちかねて、扉をあけると一散にとび出して鼠よりまだ早くかけ廻る。部屋をまわってベッドの所へかえって来た時、一寸お尻にちょっかい出してあげると喜んで一層速く廻ってくる。また手を出すとますます加速度がついて果てしがない。下の部屋の人は本当に天井に鼠が駆け廻っていると思っていたかも知れない。

わたしがそれでもまだ寝ていると、勢いをつけてキクはベッドにとび乗ってしまう。ふとんを両手（前足）でいちいち押して歩いて踏みならす。シーツが皺になってかたまっている所があると、炭坑節みたいに掘ったり押ししたりして遊ぶ。わたしの上に乗って来る時は、くすぐりたいけれどずまして寝たふりをしている。しばらく静かになっていると思ったら、シュシュと鼻息が近づいて来て、いきなりつめたい鼻をほったにきゅっと押しつけて行っちゃう。顔はまたいで行くし、咽喉の上で一休みしたことさえある。こちらがかまいさえないければ、本当にたのしそうだ。あまりかわいいから抱きしめたいけれど手を出すといけない、びっくりしてしまふから。でも、仰向けに寝て、寝間着のおなかの上にキクをじかにのっけてやると、はじめ固くなっていたのがわたしの呼吸を感じて安心して落着いてきて、そのまま咽

喉をのぼしてやすらいで何時までも寝ていた。こんな思いきった大胆さをキクが示したのは八年間の歴史で初めてのことだった。

赤ちゃんの時は抱けても、大きくなるとさわれる動物ではなかった。それでもしつこく氣長に努力したら五分、十分とさわるようになった。抱かれるだけでなく、そのとき体の力を抜いてしなだれるようになった。それでも一度うっかり医者につれて行くと、かわいがった分が一ぺんに一年も二年もあと戻りした。耳が油で揚げたみたいに腫れたのでざるに入れて注射してもらいに連れて行ったら、診察台でもう立てないほど怯えて、そのあとわたしに抱かれなくなつてなん年分も損をした。だから、それから完全に入らずで、排泄のしつけ、鼻ピンの罰や舌打ちの合図などの約束ごとをちゃんと決めて、きめこまかく、ふたりでくらしに来た。わたしの舌打ちの音、わたしの唾の味をちゃんと覚えて、みかんの袋だつてわたしの口から出たものでなければ食べなかった。こうしてふたりで住みかさねてきたから、去年の「あつたかい秋」があつたのだ。誰かが来るとかごの中に隠れてじっとしているが、ドアが音立ててしまると扉の金網をひつかいて出してくれとねだる。出してやると、部屋のまんなかに後足で立って、両手を牛肉色の舌でネロネロとなめては、やれやれやっど、という風に顔から耳のうしろまでを洗うのだった。——そのキクがめくらになって、もとの「兎」にもどつてしまった。

キクのかごは二層に分れ、上の底が金網のすのこになっておしつこと粒つぶの「兎の糞」が下のひきだしに落ちる仕掛けだ。目が見えなくなったキクが暗さにおびえて一切手を触れさせ

なくなつたので、(最初の晩わたしは泣いてばかりで何も出来ずにいたが)出口の外にクッションと枕を敷いてかごと畳との段差を埋める通路を作つてあげた。いくら扉をあける音を聞かせていざなつても、怯えて耳を立てるだけだったが、パセリの葉で釣ったりして、三日目の今日の午後から「通路」をつたつて出て来れるようになった。人間でも失明した人は目標を見定めることができないから、いきなり顔ごと体ごとさぐるようにそちらに向けながら進みだすけれど、キクの動作がちょうどその通りだった。かごから出られたのは嬉しかったが、これではやはり失明は本格的なのかと氣持がまた沈んだ。

まだ光は微かに感じるのか、椅子の蔭に首だけつっこんでそれで隠れたつもりになつてゐる。かごに戻してやるためにつかまえようとすると、目の見えないキクが首を左右に振つてわたしの手をさわらせない。怯えて硬直しているのを無理やりつかんで押しこむようにかごに入れると、扉のところから前足も使わずに頭からのめりこんだ。そして五分もゆさゆさふるえていた。おまけに左へ左へだんだんかしいで、傾きながら大きな顔にたくさんしわを寄せた。

かごからひとりで出られるようになってから、何度かキクはゆり椅子のとがつた足の先にぶつかった。悪いことに、びっくりすると暗いところへとびこもうとする本能が出るから、椅子の間の横木にまた正面からぶちあたることになる。目が見えないのに跳ばなければいいのにと思ふけど、力が入らないくせに却つて不安げに高くとんでしまう。だから宙に浮いている時間が変に長いのだ。顔の骨が木にぶつかる音をきくとその音が耳に痛くて、——かわいそうだから夕方までかけて痛そうなものをすっかり整理した。ガス・ストーブだけ残して、椅子なんか

は机の上に上げてしまい、小物入れのひきだしと軽井沢でみつけた三脚のすてきな小机も、前からそれを欲しがっていた隣の中国人の奥さんに上げてしまった。(この奥さんは主人と喧嘩するとやって来て、わたしのことを一人でいるのがうらやましいと口ぐせみたいと言った。でももう自分は歳だからと言うから幾つときくと三十五だと答える。それで歳だ、なんて腹が立ったが、いつもキクのことを大きないい「兎子」^{トッイ}だとはめてくれるのが嬉しかったから、思い切って上げてしまった)

こうして物がなくなると、今まで隠してあった絨緞の破れ目がみんなあらわになった。いちばん大きな裂傷は菱形に、厚くて固い古絨緞から畳表を刺しぬいて下の藁まで鋭角に深くえぐっている。もちろんキクの仕事だ。キクは安易な作業が好きじゃない。刷りたての新聞、とくにグラビアの匂いは好きだからかじるが、軟かいボール函なんか上げてもうすぐに飽きてしまう。そこがまたえらい。

台所・食堂兼応接室・寝室と自称してアパートの部屋を細かくカーテンで区切り、壁も床も物でいっぱい埋まっていた時には、それなりに一人の女の棲み家みたいに思っていたが、すっかり片付けてしまった今は細長い、うさぎの運動場にすぎなくなった。でもそのことはわたしにはうれしい。一番奥の窓際にキクのかご、そこから一メートル幅で奥行五メートルの運動場が表の窓に面したこちらのガス台の下まで続いている。畳の上に色変りの古絨緞が三つだんだらに敷いてあり、その脇にわたしのベッドとキクのパセリや大根葉の入った冷蔵庫が居候のように並んでいるだけだ。

押入れの襖の下三十センチほどがずっと端から裸になっているのも、今はまる見えだ。でも考えてみれば、今までも隠すことなんかなかったのだ。中の木の棧を一本一本ていねいにこまかく前歯のやすりにかけて、こびりついている襖紙の繊維の残りをきれいはぎ取ってある。これも丹念なキクの作品だ。もう二度とこんな彫刻は出来なくなってしまった。

今朝キクが知らないうちにトイレまでくつついて来た。用を足しているとまわりをぐるぐるまわり歩いて、わたしのお尻をちろちろと二回くらいなめて、壁にぶつかりながら狭いところをまわり歩いた。

それじゃあもうめくらがなおったのか、ただ五日間見えなくなった一過性のレンズの故障だったのかと嬉しくて、もういつまでもしゃがんでいる場合じゃないと、キクを仰向けに抱き上げてとび出したら目がさめた。

わたしの大切な写真集の表紙に、動物の目が一つだけ大きくトリミングされたものがある。ちょうど六日月くらいの形の左の目が、白い紙の上に約六十度の角度に印刷してあって、その下に英語で、——わたしの直訳によると、「誰の目でしょう？ 私は」と書いてあった。

その目はいかにも利目とめという感じで、表紙の奥から自分を光らせてのぞいている。穀物の粒のように隅々までひき緊まった感じだった。

「わかった、うさぎの目でしょう？」

とわたしは言った。

——いまのわたしなら、ちょっと澄ましてバsgaid風にこう言うだろう。「よくごらん下さい、このまつ毛を」そして指で示しながら、「上に前半分、下にうしろ半分、合わさるとちゃんと一列になります。いったい世の中にこんな精巧なまつ毛が他にあるでしょうか」と。

動物の写真ばかり出てくるその本のページを繰って行くと、終りの方に両手をほった脇にあて、これから顔を洗おうとする兎独特の姿勢で、この目の持主が立っていた。そこは野原に木が倒れているようなところで、白黒の写真だから本当の毛の色は判らないが、元氣そうな「黒兎」だった。

その頃のわたしは、自分自身が仔うさぎだった。その写真の目玉が兎のものであらうと、狐であらうと、大した問題ではなかった。ただ誕生日に思いがけないプレゼントをされたことに有頂天になり、こういう写真集をわたしのために選んでくれた人のやさしさに心がはずんで、親や兄たちの「地叩き」の警告なんか耳に入らなかった。

わたしはその頃家を出て、自分の部屋を持ったばかりだった。まだキクが来るよりずっと前のお話である。わたしの出発点は自分の部屋で独立することだった。下町の父の仕事場のある家を出て、自活するんだとある日宣言した。知合いの運送屋さんを頼んで小さなトラックに少しの荷物を積み、若いご主人が運転しておくさんが荷物の上に乗った。わたしは助手席で、兄がオートバイで先導した。ほんとうは兄も行先を知らないで、

「どこだ？」

「次ぎ、まがるのか？」

と一々わたしに聞くわけだ。わたしの通った学校のある坂にさしかかって、

「次ぎどこだ？」

「右……」

というところで泣いてしまった。わたしが声を出せないで目をおさえていると、

「まっすぐでいいのか？」

まるで楽しい所へ行くみたいに兄がたずねた。——その時に「わたし」が出来たような気がする。強情を張って、こんな風にわたしの「わたし」がはじまった。

それからわたしはその動物写真を撮った女のひともしきになった。ヨーロッパ生れで、動物ばかりうつしてきた人だという。白黒の写真はどれもすごくあったかい。あたたかさを一生ねらいつづけてきたのがすてきだった。

おなじ人の写真集がいつのまにか十冊近くなかった。どれにも大事な思い出が残っているが、その後ヤクを飼いはじめてからは、最初にもらった「目」の表紙の一冊が、まるで「ふしぎな預言書」のように見えてきた。まさか本当にうさを飼うようになるとはね、と言ったり思ったりしていたが、ところがそれもまだ今から思えば判っちゃいないのだった。あの「目」の預言は、いまのこの事態を指していたわけだ。

わたしは毎年とりわけお正月が近づくとき駄目になるらしい。らしい、というのとは自分ではこたわっていないつもりだけれども（それは歳のことじゃない。歳なら人並みにこたわっている）、それをいちばん嫌な風に気づかわれているのがよく判って、それがまた癪にさわって意